

所有の王

大村伸一

目次

- 1 僕は誘拐され皇太子の記録官に任命される
- 2 王国の歴史を学ぶ
- 3 王の戦いの証人が僕の最初の仕事になるが、不運にも皇太子の即位を目撃する
- 4 三年の後、王は国を統一し、僕は帰国を申し出る。すると、王は僕に最後の仕事を頼む
- 5 空港への途上で、世界が崩壊し始める
- 6 王を詰問し、全てがあきらかになる。王は最後の手段を提案する。
- 7 そして、世界は救われ、僕はたった一人の生存者として国に戻る。

1 僕は誘拐され皇太子の記録官に任命される

異国の、いくらかは知られた市場で、その少女と出会ったのは偶然だったとしても、その後の短いとは言えない期間を、あの国で過ごしたのは僕の意味だった。

少女は大人びた顔をしていたが、小柄で、僕の国なら中学生くらいにしか見えなかった。その少女が、品物を物色している僕に気づくと躊躇いもなく近寄ってきて、僕の名前を呼んだ。僕本人だと確認すると非常に喜んで、僕の小説を何冊も読んだのだといった。僕の小説が外国語に翻訳されたという話は聞いたことがなかったので、君は僕の国の言葉が分かるのかと聞いてみたところ、兄が勉強していたので覚えてしまったのだという。それで気がついたが、少女はまさに僕の国の言葉で話しかけてきていたのだ。

それから、僕の小説について少しだけ話をした。確かに内容をよく知っており、信じ難いことではあったが彼女の言葉に偽りはないようだった。

少女はその露天商の娘だと打ち明けてから、今は商売が忙しいので、もしよかったら、仕事が終わった後に少し話ができないかと誘われた。特にこれといった目的のある旅でもなかったもので、僕は了解し、夜にまたこの場所に戻ることを約束した。

少女の店は、他の店には見られない奇妙な模様の美しい織物を売っていて足を止める客は

多かったが、値段が高いせいかそれほど売れているようには見えなかった。店は父親と少女の二人できりもりしており、少女は少なくとも六ヶ国の言語を流暢にあやつって接客していた。だが、父親は無口でほとんど口をきかない。この人懐こい娘がいなければ、これほど客も集まらなかったのに違いない。

それからしばらく市場を物色したあと、町のはずれの安宿にもどり、夜になるまで仮眠をとった。

目覚めて質素な夕食を食べ終わると既に夜になっていて、風がひどく冷たかった。ぶ厚いコートをはおって約束の場所に戻ると、ロバにひかせた荷車にはもう店の一切が畳まれ乗せられていて、そのすぐ側で少女と父親は僕を待っていた。

僕が合図をすると、すぐに娘が近寄ってきて顔を寄せキスをしようとする。すこし驚いたが、そういう習慣のある国は多いし、僕は少しいい気になっていたようだ。唇が触れるのを期待して目を閉じたその瞬間、こめかみに激しい衝撃を感じて、僕は気を失ってしまった。

気がつくと、僕は荷車の上に縛り付けられたまま、裸の山膚の間にのぞく星空を見上げ、でこぼこした山道を運ばれていた。

縄をほどこうとしても敵わないことを悟ると、晴れ渡った夜空をながめながら、いったいどうしてこんなことをしたのかと姿の見えない親娘に声をかけた。少女の声が、あなたには悪かったけれど、こうするように命令を受けていたの、と答えた。

命令を出したのは、彼女の国の皇太子で、あの市場にいれば、僕が必ず現れるから、国まで連れて帰るようにと命じたらしい。

僕はかなり気まぐれな旅行者で、あの市場に行ったのは偶然だった。それなのにどうしてそんな命令ができたのか、僕にはさっぱり分からなかった。しかも、親娘があそこに店を出したその日の朝に、僕を発見したのだと少女は自慢げに言った。

「こんなことをしなくても、ついていったのに」

僕がそう言うと、少女はそれはどうかしらと、すこしからかうような口調で答えた。なにしろ、彼女の国は大陸の奥地にあって、複雑な国境線で幾つもの国と接している。周辺の国々との間では国境を巡って、毎日、小競合いが絶えず、今度のように国に帰るのも命懸けなのだという。

「そんな国に好き好んで行くような男がいるとは思えないわ」

と、少女は言った。

僕はどちらかというと臆病な人間なので、それを聞いてしまうとこの旅の先行きにひどく不安を覚えたし、機会があれば逃げ出そうとも思ったので、なるほど彼女の判断は正しかったのだなと、改めて感心したのだった。

父娘は、僕を無事に連れ帰るため最も安全なルートを選ぶのだと言い、危険な場所はすべて迂回して行った。そのため、通常なら一日で着くところを僕達一行は一週間もかけることになった。二日目からは、もう逃げ出す方が危険なのだとすることを理解したので、僕は荷車の荷物の身分から解放され、一緒に徒歩で行進することになった。

一週間の間に、幾度か危険な目にもあったが、無口な父親は意外にも外交の手腕に長けていて、物騒なことはほとんど起こることなく彼らの国の首都へと到着した。

謁見の間で、皇太子は、部屋に入ってきた僕に気がつくと、本当に嬉しそうな笑顔を浮かべ、僕が近づくの待った。

皇太子は、王の代わりにこの部屋で、国民の請願を直接聞いているのだと、少女が僕に小さな声で教えてくれた。皇太子の濃い灰色の服は、今日初めて着たかのように、ぎこちない着こなしだった。

皇太子を取り囲むように三人の体格のいい男がいた。護衛なのだろう。揃いの土色の服は、本当に土でできているように見え、息をひそめれば彼らはただの土人形としか見えなかったはずだ。彼らから一步離れ、皇太子の背中に隠れるように、薄い灰色のスーツを着た痩せた男がいた。小柄な男で、じっと皇太子を見つめている。それ以外のなににも興味がないようだった。そこにいたのは彼らだけだった。

二メートルほどの距離で、僕はそれ以上近づかないようにと、土色の服の一人に制止された。だが、皇太子は自分から僕に近づき、僕を古い友人ででもあるかのように抱きしめた。高貴な人々はそのようにして、自分の信奉者を作り出すのかもしれない。

それから皇太子は僕の故郷の言葉で話しかけてくれた。このように乱暴な方法で招待した事を謝罪し、僕が思わず光栄ですと答えた後は、僕の書いた数少ない小説について、とても好意的な感想を話してくれた。少女の話にでてきた兄というのはきっとこの皇太子のことだったのだろう。だが血のつながりがあるのかどうかは、結局最後まで分からなかった。

それから僕は、一番知りたかった質問をした。

「いったいどうしてこんなことをしたのですか」

皇太子は、ためらいのない口調で、

「この国のためにあなたが必要だったからです」

と答えた。

母国ではまだ誰にも知られていない小説を書いているだけだし、大陸ではただの旅行者にすぎない僕に、いったい何を求めているのかと、もう一度尋ねると、彼は、このように答えた。「あなたには、私の専属の記録官になっていただきたいのです。これは、ずいぶん昔から切望していたのですが、なかなかお話しする機会がありませんでした。」

と言い、僕の返答を待った。「記録官」といういささか退屈そうな仕事が、僕に務まるわけではないと思いきや、皇太子は、数年だけでもかまわないからと、譲らなかった。

そのとき僕の頭の中に『重大な決断は一瞬で』という、ユマニ社のテレビCMがふと浮かび、僕は何かお受けしますと答えてしまっていた。後で考えるとなぜそんな決断をしたのか、すこしも分からなかった。それに、そんなCMが本当にあったのかどうかも、思い出すことができなかった。

その日は、それ以上は話せなかった。最後に、「明後日の朝、我々と隣国との戦があります。できれば、あなたにも同行していただきたいのですが」

と皇太子は、真面目な表情で言い、僕の手をとった。ますます、状況が飲み込めなくなった僕は、その戦いがどのようなものかも想像できないまま、分かりましたと答えてしまっていた。

2 王国の歴史を学ぶ

翌日、何もすることのない僕は、いつもの旅人としての好奇心にまかせて、町を歩き回った。

大陸の奥地にある他の王国には幾つか訪問した経験もあったが、この国ほど眩しい国はなかった。大通りから裏通りまで、どの道路も建物も、レンガ作りだ。建物の形は思い思いだが、そのレンガの色が赤や黄色やオレンジ色に青や紫のレンガを気まぐれに混ぜ合わせたとてもけばけばしい色彩になっているのは同じだった。しかも、そのレンガの一割から二割は、反射鏡になっているらしく、日の光を反射して街中がきらきらと光っていた。日の角度によつては、どちらを向いても眩しくて目を開けていられないことさえあった。

大通りにはたくさんの商店が並び、町を歩く人々は賑やかに声をあげているし、子供たちがいたずらをしては逃げ回り、妊婦は幸せそうに歩いている。戦争とは無関係なこの光景が、明日の戦いとどう重なるのか、僕には想像できなかった。

午後になって気づいたのだが、そもそも、明日、戦争に出発するというのに町のどこを見ても兵士の姿が見あたらない。宮殿の近くに軍事施設があるのかと探してみたが、武器らしいものさえどこにも見つからず、夕方になるころには、皇太子の言葉を何か聞き間違えていたのではないだろうか、と、いぶかしみはじめてさえた。

夕方、ホテルに戻ったとき、皇太子の使いがきて、戦の前の晩餐というものに招待された。

それでようやく、自分の聞き間違いではなかったのだと、納得したのだった。

食卓では、主賓である王と王妃のすぐそばに座らされた。最初は緊張したが、王も王妃もまた皇太子と同じように親切で、僕の来訪を心から喜んでくれているのが伝わってきた。

振舞われた料理も酒も、この地方独特の発酵したミルクかなにかの酸っぱい味がしたのだけれど、それにはすぐに慣れてしまい、慣れただけでなく食欲をそそるその味覚に、思わぬほど何皿もの料理を平らげてしまった。

食事を終え、寛いでいるとき、僕は、兵士や武器はどこにあるのですかと尋ねた。その質問を意外そうな表情で受け止めた王と皇太子は顔を見合わせたが、やがて王自らが、どこから話したのかと言い、こういう話を始めた。

「私の国は七つの国と国境を接しています。さらに、この地域には、現在、十五ほどの国が存在します。もともとは一つの国だったのですが、初代の王が亡くなった後、国は乱れ、このような状態になりました。どの国にも王がいますが、私を含めすべての王が、自分は最初の国の王位継承者だと称しています。自称などではありません。王位継承者には特別な印があるのでそうと分かるのです。そして残念ながら、この二十足らずの国のどの王位継承者にも、その印があるのです。

最初の国の法律によると、王を決める戦いは、王位継承者だけで戦わなくてはなりません。つまり、大勢が争い死ぬような戦いは許されず、一对一の決闘によって勝利者を決めるのです。私たちは、その決闘のことを「戦」と呼んでいます。確かに、どの国にも兵士はいるのですが、彼らは国土を守り不当な侵略者を追い返すのが仕事です。こんな市内ではほとんど見かけることはないでしょう」

「そんな国は他に見たことがありません。国民の命を尊重する素晴らしいシステムですね」と僕はうっかり言ってしまったが、皇太子は

「それでも負けた王は確実に死ななければならないのです」と、さみしそうに答えた。

3 王の戦いの証人が僕の最初の仕事になり、不運にも皇太子の即位を目撃する

王の戦のためだけに建造された建物は、戦を誰も邪魔出来ないように頑丈に作られていた。特にオレンジ色と赤色のレンガをたっぷり使い、その隙間を埋める鏡のレンガは周辺の建物の青色や貴色を反射し、外から見ると建物が燃え上がり炎に包まれているように見える。

戦の行われる部屋の四方の壁は厚いカーテンで覆われていて、窓があるのかどうかも分か

らない。たぶん、窓がないことを隠すために、カーテンが降ろされているのだろうと思った。

部屋は防音になっていて、無音の圧力が耳を圧迫する。誰かが言葉を発すると、その言葉が周囲の音を吸い込み、頭の中に蓄えられていた音さえ吸い出されて、意識が遠くなるように思えた。

部屋の中央には矩形のテーブルが置かれている。一枚の岩から切り出したらしいテーブルは大きく頑丈で破壊することなど不可能に見えた。室内の光源はテーブルに直接当たらないように配置されていたので初めは分からなかったが、テーブルの表面は磨きあげられた鏡になっていた。鏡には、ただ模様のない天井が映っているだけだった。

テーブルの向かい合う短い辺にそれぞれ王が座った。長い辺の中央、二人の王から等しい距離に離れて、灰色の服を着た痩せた男が立っていた。テーブルからすこし離れて、王の付き添いのための椅子が置かれていた。それぞれの王に三名の付き添いがいて、次に王位を継ぐ者と、その他二名という構成は、向こうも同じだと、皇太子は教えてくれた。

付き添いの一人は、昨日皇太子との面会の時に皇太子の背後に隠れるようにしていた男だった。薄い灰色の服を纏い、痩せて、人生には何ひとつ楽しい事などないのだと知らせる為にいつも不愉快そうな顔をしているのだろうか、僕は思った。服の色に溶け合っているかのような肌色、冷たい視線、そして彼はいつも何かをつぶやき、手帳に何かを書き留めている。

皇太子は、彼は記録庫から来た者だと教えてくれた。記録庫は最初の国が分裂した時に作られた機関であり、王の所有物をすべて記録しているのだと続けた。「だから、常に王のそばにいて、何が王の所有になってゆくのかを、監視しつづけているんだ。大変な仕事だよ」

相手の王の側にも、ひっそりと同じ姿をした男が立っていた。僕は皇太子に視線で男を示しながら、彼もなのかと尋ねた。

「勿論、すべての王と王位候補者に記録庫から記録官が派遣されているよ。彼らは旧王国に属していて、今の分裂した国々を自分達の領土に過ぎないと考えているから、国境というものに頓着しないんだ。いずれ、すべての所有物は一人の王に所有されるようになるのだから、すべての王の記録は確実に取っておかないといけない。そういう論理なんだ」

「彼らも記録官なんですね。それなのに、何故、さらに僕を記録官にする必要があったんですか」

そう尋ねると、皇太子は答えた。

「彼らは、王国の過去から来て、内側からすべてを記録している。だが、私は、それだけではだめだと思っている。君のように外部から、この国に起こることを見て、記録しなければだめなんだ。真実と偽りは、両方が揃っていないと、やがて磨耗し何も残らなくなる」

皇太子の言葉の意味は分からなかったが、これほど自分を重要な存在として扱ってくれた

人は初めてだった。

「机の中央にいる彼は、この戦いの審判官だ。見た通り、彼も記録庫の人間だよ」

皇太子がそう言ったとき、王の戦いが始まった。

審判官が戦いの始まりを短い言葉で宣言すると、二人の王は自らの名前を名乗り、戦いが始まった。それ以上のセレモニーはなかったので、僕は拍子抜けしてしまった。これでは、何万もの人や物の運命を決定する戦いというよりも、スポーツの試合ではないかと、僕は思った。

王はそれぞれの服を上半身だけ脱いだ。腰から首の下まで、入り組んだ曲線の刺青が、皮膚をびっしりと覆っていた。線は丁寧に色分けされており、それを見て、皮膚にそれほどたくさんの色彩を与えることができるものなのだろうか、僕は驚いた。微妙に異なる色に塗り分けられた刺青は、全体として何かひとつの絵になっているのに違いない。あまりにも複雑な模様は、単なる落書きではあり得ないと思わずにいられなかったのだ。だが、それが何の絵なのかはその時も、その後もずっと分からなかった。

上半身の刺青をさらけ出した後、鏡面になっているテーブルの表面に映ったその刺青は、刺青ではなく、純粹な模様が変わってしまったようだった。純粹になることでその繊細さを増し、独立した生き物のようにも見えた。皮膚というやわらかな素材から、硬直し磨きあげられた表面に移動することで、その存在がより鮮明になったのだろう。

鏡の中の刺青は、皮膚から解放され、自由を楽しむように活発に動き始める。それから、模様の一部分が、他の部分から剥がれ、テーブルの中央に進み、鏡の中で別のものに姿をかえてゆく。

二つの刺青から生まれた何かが、ゆっくりと近づき戦い始める。

テーブルの中で、彼らの刺青から生まれたものは、熊と象に似ていた。我々の王の刺青から生まれた熊は、彼らの王の刺青を母体とする象の半分の大きさもなかった。

熊と象は相手の動きを牽制しながら近づき、やがて、その体から伸ばした触手の先端がふれあい、癒着する。そして、繋がった部分から次第に二つの像は溶け合い一つに変わってゆく。

その間も、王は二人とも大量の汗を流し、息を荒げている。体の筋肉が、硬直し痙攣し始めるのが分かる。この戦いが二人の王にどれほどの苦痛を強いているのか、そのときの僕には想像もできなかった。

熊と象はがやがて見分けることもできない一つの塊になるが、痙攣するようにしばらく震え続けた後、再びひとつの形に変わっていった。すこしづつ震えが消えて、その形がはっきりと見えてきた。それは、以前の倍以上に膨れた熊だった。だが、その形は不安定で、雲のように

ゆっくりとねじれて、奇妙な形に変わろうとする。その歪みに抵抗するように、熊の形に戻ろうとしては、また崩れてゆく。それを何度も繰り返した。

突然、相手の王が倒れた。彼の付き添いが駆け寄るよりも速く審判官が王の体を隠すように覆いかぶさり、状態を確かめる。ほんの数秒の後、審判官は顔をあげ、こちらの王の勝利を宣言しようとした。だがその時、テーブルの中の熊は、明瞭な形を失い再び雲の形状に戻る。そしてそのとき、我々の王も力尽きてテーブルの上に倒れた。

審判官は我々の王の勝利を宣言するとすぐさまテーブルをまわり、我々の王の許に走り寄る。そして、王の脈を見て目の中を覗き込んだ。我々の王もまた命を失ったことは、離れた席からでも分かった。それぞれの王専属の記録庫の男は、平静なふうではあったが、素早く審判官の元に集まり、甲高い声で議論を始めた。議論はすぐに終わり審判官は立ち上がると、こちらの皇太子に今この場で即位せよと命じた。皇太子は、すでにそうなることを悟っていたのか、冷静にその命令を受け止めていた。だが、敗北した王の皇太子は、父親の死がよほどつらいのか、ぐったりと床に座り込み、顔色も青ざめている。

死を悼む時間もなく、記憶庫の三人は慌ただしく働いた。テーブルの上にシーツを敷き王の二人の体をその上に運んだ。王の体に残された刺青の模様は複雑だけでなく魔力にも満ちていて、見ているだけで、めまいがし、吐き気さえ覚えたが、それと同時に、何か暖かいものが心の中にめばえてきて、豊かなものがそこに描かれているのだということは当たり前の事のように理解できた。

それから、我々の皇太子が服を上半身だけ脱ぎ、二人の王の体の間に横たわった。皇太子の胴体の中央には、王とは大きさは比べようもないがやはり鮮やかな刺青が刻まれていた。

儀式が始まった。

まず、二人の王の体のそれぞれの上に、真っ白い布が被せられる。布はそれぞれの王の体にきつく巻きつけられた。それから、呼ばれて来た僧侶らしき者が、我々の王の体に向かい恭しく奇妙なリズムで言葉を唱え始める。それは僕の知らない言葉だった。破裂音の多いその言葉は、僧侶独特の節で詠まれていることもあるのだろう、何一つ意味が分からなかった。その言葉を聞いていると、布に包まれた王の体を見ていたはずなのに、やがて僕の頭には王の人生の出来事が次々と浮かび、それに夢中になってしまっていた。夢を見ていたのだろうか。それは、言葉が終わるまで続いた。

やがて言葉が終ると、審判官は、我々の王にかけられていた布をはずした。驚いたことに、王の体の刺青はあとかたもなく消えている。そのかわり、王の体を包んでいた白い布の内側に、ちらりと、あの刺青の模様が写っているのが見えた。そして、その布を皇太子の体に巻きつけ、また、僧侶が長い言葉を唱え始める。

この作業は、皇太子にとって苦しいものらしく、言葉が唱えられている間、苦痛の叫びをこ

らえるような、押し殺したうめき声が、聞こえ続けていた。そして白い布がはずされると、今度は、布に写し取られていた刺青が皇太子の体に完全に移し刻まれているのが見えた。僕は、見たものが信じられず、驚いた。

だが、儀式はまだ終わってはいなかった。敗北者であるかつての王からも、刺青を奪い、新しい王に移さなくてはならないというのだ。白い布に包まれたままのもう一人の王の体に向かって、僧侶がまた何かを唱え始めた。それは先の王の言葉とは別の言語だった。母音が多く、まるで獣が吠えているかのように聞こえる。今度こそ目を開いて最後まで白い布に包まれた男の体を見続けようと思っていたのに、やはり、いつの間にか、目の前に現れた見知らぬ男の一生に夢中になっていた。

詠唱が終わり、巻き付けていた布が完全に刺青を吸い取っていることを確認し剥ぎ取ると、男達は新しい王にそれを巻きつけ、またあの言葉を唱えはじめた。前よりもいつそう苦しうなうめき声が、布の中から聞こえた。もはや、こらえることができないのか、ときどき、絶叫が混じる。

新しい王が気を失わなかっただけでも奇跡だと、僧侶たちは賞賛していた。布をはずすと、王の体には、二つの刺青が複雑にからみあった、新しい刺青が刻まれていた。

疲れきった新しい王は、そのまま医療施設に運ばれた。体に危険はないが、とにかく休息が必要なのだと医師は言っていた。

ベッドに横たえられた王は、よほど精魂を使い果たしたのだろう、げっそりと痩せた顔でしばらく眠っていたが、医師によると移植された刺青の作用で直ぐに回復するだろうと言われた。その言葉の通り、王は一時間ほどで血行も良くなり元気になった。そして目をさますと、興奮した口調で、僕にいろいろなことを話してくれた。

刺青について僕が尋ねると、王は楽しそうな顔で、こう教えてくれた。

「この刺青は、私が何を所有しているのかを書いた、いわば財産目録のようなものなんだ。この国の王家では、子供が生まれると、臍を中心に最初の刺青をいれる。それは、命をあらわしている。そして、さまざまな祝いの品が届くと、それらの品の名前のひとつひとつが、この刺青に付け加えられていく。祝いの品は、その赤ん坊の所有物だからね」

「ちょっと待ってください。そんなふうに、手に入れたものを全部刺青にしていたら、数年もしないうちに、体中が刺青になり、もうそれ以上、刺青をいれられなくなるのではありませんか」

その質問には、意外な答えが返ってきた。

「それは大丈夫なんだ。どれだけたくさん刺青を加えても、それは既にある刺青になじんで、ある程度以上は広がらなくなる。これは、わが国の聖職者が秘密に伝えている特殊な数学と、それと同じくらい昔から伝えられている、化学者達が発明したインクによって可能になった

ものだ。王になれば、そこにすべての国民の名前や、所有する土地の名前も刻まれることになる。それでも、これ以上刺青が広がることはないんだよ」

僕には信じられなかったが、二人の王の刺青は、確かに一つになり、彼の体におさまっている。そのくせ、部分部分が小さくなるとか、一部が省略されとかいうことはない。二人の王の刺青のすべてが、そのまま新しい王の体に刻まれているとしか見えない。

「信じるしかないな」

僕のその言葉に、王は、本当に楽しそうな微笑をうかべた。

その日は布に隠されて分からなかったが、その後、何度か、刺青を加える場面に居合わせることもあり、今では、加えられた刺青がどんなふうに古い刺青になじんでいくのかも知っている。だがそれを言葉で言い表すのは難しい。誤解されることを恐れずにあえて表現してみるとすれば、刺青が生き物のようにうごめき、お互いの模様を自分の中にとりこみ、やがて一つの模様として完成する。そんな感じだ。最初にこの刺青を見たときに感じためまいは、一つであると同時に二つであり、二つであると同時に無数であるこの刺青の、曖昧さの故だったのだろうと、やがて思うようになった。

「これから、まだまだ戦が続くんだろうね。最後の一人の王が決まって、彼がすべてのものを所有することになるまで」

僕がそう尋ねると、王は何もいわず、ただ僕の目を見つめてうなづいた。

4 三年の後、王は国を統一し、僕は帰国を申し出る。すると、王は僕に最後の仕事を頼む

あの初めて目撃した戦いから三年の間、僕は王の傍で生活し、王の戦いをすべて記録してきた。気まぐれな運命に与えられた僕の役割は、この戦いの記録を残すことなのだと、僕は幾度も自分に言い聞かせてきた。全てが終わるときまでここからどこにもいかないと、王の即位の日、僕は決意していたのだ。三年の間に何度もの戦が行われた。そして、昨日、最後に残った二人の王の戦いが遂行され、我々の王の勝利で決着を迎えた。この王国は、再び一つの国へと統一されたのだ。

これで、歴史を記録するという僕の仕事は終わったと思い、祝賀の宴の後で、暇を告げるために、僕は王の許へ向かった。すると、王は、残念そうにこう言った。

「君は仕事だけでなく、親友としてこの国に残ってくれるものだと思っていたよ。だが、仕方がないだろう。君は旅人なんだからな。そう思ったから、期間を決めて君に記録官を依頼したんだ」

それからしばらく思い出話をした後、王は真面目な顔でこう話し始めた。

「最初に会った日、君は、いったい何のために自分をここに連れてきたのかと尋ねたね。あのときは、説明しても君に理解できないだろうと思ってきちんと答えなかったが、これが最後なら、ちゃんと答えておかなくてはいけないと思う。

君には以前、この刺青は、私の所有物を書いた財産目録のようなものと説明した。確かにそうなんだが、実は、この刺青にはもっと深い意味があるんだ。

私が戦いで勝つたびに、敗北した王の刺青を私の体に刻み加えていったのを見ただろう。もしも、この刺青が単なる財産目録なら、あれは形式的なものでしかない。多少、神秘的な現象は起きているにしてもね。だが、実は、あれは形式以上のもっと現実的なものなんだ。

実は、この刺青に刻まれ加えられた名前の指し示すものはなんであれ、すべて私の所有物になる。ううむ。この言い方ではよく分からないだろうな。刺青として刻まれることで、それは私の所有物になるんだ。これなら分かるだろう」

僕は、しばらく分からなかったが、やがてその意味に思い至ると、驚いて聞き返した。「すると、所有したから刺青を入れるのではなく、刺青を入れることによって、それが君の所有物になるというのか？」

王と同じことをただ繰り返しただけだということにさえ、そのときの僕は気づいていなかった。王は、僕がきちんと理解したことに満足した笑みを浮かべ、さらに驚くべきことを告げた。

「そのとおりだ。そして、唯一の王となった私の体の刺青には、実は、この世界のすべてのものの名前が刻まれているんだよ。まあ、例外もあるんだが」

僕はまた聞き返さなくてはならなかった。

「すると、君は、世界のすべてのものの所有者になったというのか？ どうしてそんなことが可能なんだ？」

王はどこから話そうかと、空中に目を彷徨わせてから、こう話し始めた。

「この国は、世界の他の国々が生まれるはるか以前から存在している。そして、ずっと他の国々を観察し、その国々に生まれるすべての人や物とその名前を収集してきたんだ。王の体の刺青としてね。だから、王の体の刺青には、これまでに存在した、世界のあらゆる国の、名付けられたすべてのものの名前が一つ残らず刻み込まれている。世界は私の所有物なんだよ」

そう言うと、王はさみしそうに僕をみつめた。

何も答えられない僕に、もう一つ、王は教えてくれた。

「それから、さっき、この刺青に刻まれている名前には例外があると言っただろう。その例外の一つが、君の名前だ。

どうしたことか、君が生まれた時、君の名前が報告されず、王の体に刻まれることをまねがれたのだよ。こんなことは、この刺青が生まれてこのかた、一度も起きたことがない。前の王である私の父は、それに気づいたとき、すぐにも君を所有物に加えるつもりだったのだが、私

がそれを止めたんだ。君のような人間が存在することは、我々、王にとって非常に大きな意味があると思わないか。王と対等な存在がなければ、所有するということに何の意味があるだろうか。だから、私はそう言って父を説得したんだ。

君は、王の所有物でなく、王に支配されない独立した存在だ。だから、私は君と対等の立場で親友になれるのではないかと期待していたんだ。そして、私の期待は十分に満たされたよ。長い間、この国に尽くしてくれて感謝している」

王はそう言うのと、まだ驚きで混乱している僕を立たせ、強く抱きしめた。

それから、体を離すと、最後にひとつだけ仕事をしてくれないか、と言った。混乱したまま、僕が承諾すると、王は僕を連れて、誰もいない隣室へと入っていった。そこは、刺青をいれるための部屋であり、いつもなら、僧侶たちが控えているのだが、そのときは、誰もいなかった。

王は上着を脱ぎ、処置台の上に座った。

「これから、私が皇太子の頃から考えていたことをしようと思う。いずれすべてを所有する王になったとき、しなければならないと考えていたことをしようと思う。それを君の記録に残してもらいたいんだ。この体に背負うすべてのものというのは、想像以上に重い。でもまだ足りないというわけさ」

そう冗談めかして言うと、王は刺青の針を手にとり、自分の体に針で文字を刻みはじめた。「これは、昔からやってはいけないと禁じられていた行為ではある。これまでのように、王位後継者が複数存在する状況ではそれは禁じられなければならない。そう私は理解している。だが、唯一の王になった者には、これを実行する義務があると思うんだ。私は、ずっとそう考えてきた。

君は自分が何者なのか分かっているかい。所有するとはどういうことか分かっているだろうか。世界の所有者になることがどんなことなのか、唯一の王になった今、私は、自分の刺青が意味する、大勢の王の血、その中には自分の父親も含まれているんだよ、そんな血にまみれたこの「所有する力」について、本当に理解している唯一の存在になってしまった。だから、これから、私は、なさなければならないことをしようと思う。なに、大したことはない、刺青がひとつ増えるだけなんだから」

僕には彼の言うことの意味が何一つ分からなかったが、僕の目の前で、王は素早く自分の体の中心に、数文字の短い言葉を刻んだ。刻み終え、針が離れると、王の体の中心にある刺青がうごめき、その名前がとりこまれていった。

王は、あたりを見回し、何か変化があったかどうか確かめるような顔つきになった。しかし、しばらく待っていても、何も変化は起きなかった。

王はそれを確認すると、楽しそうにこう言った。

「ほら、いいつたえなどこんなものだ。世界は相変わらずだし、私自身も何も変わっていない。私は、為すべきことができて、非常に満足だ。これで、世界を所有する王としての責任もはた

すことができた。

ありがとう、これで私の憂鬱にも一区切りがついたよ。この国の復興に尽くしてくれた君にはとても感謝している。一生の間、どんな便宜でもはかるから、何でも言ってくれたまえ」

そんなことを言いながら、王と僕は別れの言葉をかわし、そのまま僕は国を離れることにした。

5 空港への途上で、世界が崩壊し始める

首都は、どの道も建物もここ二年程の間に整備され、綺麗になっていた。ただ、建物は相変わらずレンガ作りなのに、何故かもう鏡のレンガもさまざまな色のレンガも使われなくなっていて、どの街角も灰色だった。町を離れる僕には、あの生き生きとしていた三年前の町とは違う別の町にしか見えなかった。

国際空港のある都市までは、車で二時間程の距離だった。

三年前は、ロバに引かれた荷車と一緒に、細い山道を危険を避けながらやってきたのだが、三年たった今、国を縦横に走る国道は何の危険もなく自動車が走り、旅は散歩か何かのように気軽なものになっていた。

この一年余りは、国境の治安も安定していて、僕はこの道を何度も往復していたから、道に迷うことなどありえないはずだった。それが、町を離れて車で一時間ほどが過ぎたとき、僕は見たこともない道に入り込んでしまっていることに気づいた。「見たこともない道」というのは必ずしも正確ではない。こう言うほうがより近い。「いつもの道が目の前で変わり、よく知った道を走っていながら、そこが知らない場所に変わっていった」と。

初めは目が疲れていて、景色がぶれてみえるだけかと思った。やがてそれは、見逃しようのない現象になった。山の中腹を一直線に横切っている舗装道路に車を走らせていた。綺麗に切り揃えられた木々の枝や葉がさあどうぞと招くその中心に開いた空洞に、車は吸い込まれてゆくようだ。だが、車の前方に空いていた空洞が、瞬きする間に消滅し分厚い木々の壁に変わった。道がなくなったのではなく古い山道に変わったのだ。舗装されていない路面に車が激しく上下しハンドルを取られそうになる。慌てて速度を落とし停車させようとする、次の瞬間、道は元の完全に整備された車道に戻っていた。

車を止め、何があったのだろうと思い前方を見ていると、そこに起きている変化が次第にはっきりと分かってきた。森の中に続く見慣れた道路が、そこに注意を向けているとくしゃりと潰れて針金のような線に変わり、それがよじれて何かの文字のようになる。それが文字だということはすぐに分かった。それは僕が一度も見たことのない文字だったが、それでも

その意味は分かった。間違いなくその文字は「道」を意味していた。

文字となった道の変化はそれで終わらなかった。文字は次の瞬間から、僕の知っているすべての道に姿を変え始めた。僕が子供の頃何度となく通った通学路の石畳の道が続いていた。そんな場所にあるはずがないのは分かっていたが、その道は確かにあの懐かしい道だった。曲がり角の石の柱に僕の発明した楔形文字の印があった。間違いなくあの道だった。だが、懐かしい道だけがそこにあるのではない。舗装道路と通学路が共存するその空間に、僕の知っている遠い島国の汚い路地裏の細道が重なった。それだけではない。その同じ空間に、この舗装道路が完成する以前に僕がここを通ったときに見た、半ば整備され半ば荒れ果てた過去のこの道路が、幾つも見えた。僕がここを通るたびに見た道路の姿が、同時に重なって見えた。

目の前に見える道は僕の知るすべての道だった。その道の数は見つめている間にどんどん増え、同じ場所に重なっていった。どれか一つの道に目を凝らすと、他の道がその存在を増し僕の注意を奪おうとする。だから、無数の道がそこにあることは分かるのだが、個々の道を見つめ続けることができない。しばらく、増殖し続ける道にぼんやりと視線を向けていたのだが、やがてその大きさもはっきりと分からなくなってきた。見える限りの道の長さは親指の長さ程しかなくとも見えるが、同時に宇宙の果てよりも遠くまで続いているようにも見えた。

僕はすぐにも逃げ出したかったが、その前に車を降りて道ばたで胃の中のものを戻した。それぞれが注意を惹こうとする無数の、幾重にも重なった存在に酔ってしまったのだと思う。

それから僕は車を元来た方向にまわし、目を閉じてオートドライブで走らせることにした。このまま空港へと進めば、意味の分からない土地で事故を起こすことは分かっていたし、この見たこともない場所で、空港に向かう道へのナビゲーションが機能するとも思えなかった。変化のまだ起きていない方向、元来た場所に戻るのが一番安全だと思った。

顔なじみのいる広場に車が入っていくと、友人たちは不思議そうに僕を見たが、僕はさもないような素振りで、車を止め、歩いて王宮へと向かった。王ならすべての理由を知っているように思えたからだ。

6 全てがあきらかになり、王は最後の手段を提案する。

その話を聞くと、王は驚いた様子で、そうだったのかとつぶやいた。だが、それ以上詳しい説明はしてくれず、もう二三日、この町で過ごしていけばいいと言った。その頃には、すべて解

決しているだろうからと。

夜になると、嵐がやってきた。激しい雨と風に、町の建物が次々と倒壊し、大勢の死傷者が出たらしい。朝になっても、嵐はやまず、被害報告は後を断たなかった。王国の全土を強力な嵐が襲い、王の財産であるすべての建造物と国民の命が奪われていった。もしも王が世界の所有者であり、この破壊の原因が王にあるのなら、この災厄は世界中で起こっているのかも知れなかった。

辺境からやってくる伝令の言葉を総合すると、王国は今やいたる所で消滅しはじめていて、嵐に破壊された後には、虚無しか残っていないらしい。虚無しか残っていないということがどういうことなのかはよく分からなかったが、恐ろしい事が起きているのはまぎれもなかった。

その後の二日間、何度か王に会ったが、その度に王の顔色は悪くなり、自分はとんでもないことをしでかしたのだと、力なくもらすようになった。

僕は、王を刺青の部屋に連れ出し、いったい何をしたのだとなじった。王は、気力を失った顔で、僕をみつめながら、ゆっくりと上着をめくりあげた。王の体を覆っていた刺青は、今では赤黒く腐り、どろりとした膿が腹から流れ出していた。どうしたんだと繰り返し尋ねると、王は、私は間違っていた。私は、すべての事に責任をとるつもりで、すべてを破壊してしまったようだ、と答えた。

「君はもう察しているだろうが、王の刺青に刻まれていない名前、その一つは君の名前だったが、私自身の名前も、そこにはなかった。

自分が自分の所有物ではありえないという、根拠の分からない理由をとなえる学者たちに従って、自分の名前を刺青にすることはずっと禁じられていたんだ。

自分の名前をほんの数文字、体の中心に刻むだけのことで、世界が変わるわけなどないじゃないか。私はそう思っていた。それよりも、自分自身さえ所有できず、自分に責任をもつこともできなくて、どうして世界を体に纏うことができるだろう。私の体に刻まれたすべてのものに対する礼儀として、私は、私自身もまた、そこにあるべきだと、ずっと昔から考えていたんだ。

もしも言い伝えが正しく、それによってなにか災厄が起きたとしても、書き込んだ私の名前を消去できるように、科学者たちに消去薬を作らせておいた。どんな事態にも対応できるように万全を尽くしていた。何も無謀な事はしていなかったのだ。

だから、戻ってきた君の報告を聞いたとき、私は自分の名前を消去することに決め、その消去薬を私の名前の上に塗った。しかし、私の名前は既に刺青の他の部分と複雑に融合しており、薬は私の名前を腐らせることしかできなかった。そして薬は私の名前に絡み付いていた

名前を片端から膿に変えはじめたのだ。

科学者達を責めてはいない。自分の名前を体に刻むなど、彼らは想像すらできなかっただろうし、すべて決断したのはこの私だ。だが、このままでは、世界が破壊されてしまうだろう。最後の王は、何という愚かな王だったことか」

近づこうとした僕を手で押しとどめて、王は言った。

「ああ、君は大丈夫だ。君は私の国民ではない。君は私の所有物ではないのだから」

そう言ったとき、絶望していた王の目に小さな光が灯り、何か希望を見つけたように見えた。それから王は視線をあちこちに彷徨わせ早口で何かを呟いていたかと思うと、やがて僕に視線を戻し、残された短い時間を惜しむように、僕に手助けを求めた。

「そうだ。唯一つ、世界を救う方法があるとすれば」

王は、処置台の下から、白い布と拳銃を取り出し、拳銃を僕に渡しながらか言った。

「君は世界を救う覚悟があるか？ もしも、君が世界を救いたいと思うのであれば、君にはその力がある。そうだ君が王になるんだ。分かるだろう、私の所有物をすべて君が受け継げばいいんだ。それはつらいことかもしれないが、いや、確実に苦しみに満ちた選択だが、世界はかならず救われるだろう。どうかそれを受け入れてもらえないか？ 他に方法はない」

そう言って、王は自分の体に白い布を巻き付け、拳銃を僕の手押し付けた。

「さあ、私の額をその銃で打ち抜きたまえ。そして、この布に吸い取った刺青を、君の体に写し取るんだ。さあ、やりたまえ」

王は、銃を持つ僕の手をとり自分の額にあてがうと、目を閉じた。

僕には誰かを殺すことなどできないうちで思っていた。それが、自分の親友であればなおさらそんなことは不可能だ。だが、窓の外の王国の建物を次々と破壊してゆく暗黒の嵐を見ていると、僕には王の言葉に逆らうことができなかった。その先のことなど、何も考える余裕もなく、僕は自分の指に力をこめていった。王の指もそれに力を添えていた。

気がつくと王の体は僕の足元に倒れていた。その体はあの布に包まれている。僕はあわてて、この三年の間に覚えた、刺青遷移の数式の解を呟いていた。どれくらい時間がたっただろう、言葉が尽きると、王を包んでいた布を剥ぎ取り、今度は自分の体に巻きつけて、ふたたび解を逆順に呟きはじめた。

体中の細胞の一つ一つをナイフで突き刺すように、激しい苦痛が僕を襲った。ナイフは皮膚の全体から体の深奥まで届き、えぐるように内臓ををかきまぜ筋肉を引き裂く。激しい苦痛に意識を失いそうになりながら、それでも解を言葉にすることはやめなかった。世界が僕の体に忍び込んで僕を支配しようとしていた。もしも支配されてしまったら、世界はきっと消滅してしまうだろう。僕は、世界を所有するために意識を失ってはならない。僕は懸命に言葉を叫び続けた。そして、最後まで言葉をつないだとき、痛みは消滅し、僕は気を失ってし

まった。

7 そして、世界は救われ、僕はたった一人の生存者として国に戻る。

気がついたとき、僕はロバに曳かれた荷馬車の上に縛り付けられているのかと思った。そして、長い長い夢を見ていたのかと思った。青い大空しか見えなかったからだ。

王国は消滅していた。

国連軍の救援隊に、破壊し尽くされた王国の瓦礫の下から救い出された僕には、不思議なことに怪我一つなかった。生き残ったのは僕だけだった。だが、世界の消滅は食い止められたようだった。

世界中で同時に発生した大災害は既に一ヶ月も前の事件になっていた。病院のテレビでは、瓦礫の下からようやく助け出された人々のことがたまにニュースになることはあったが、それはもう過去の出来事であり、大きなニュースとして扱われることはなくなっていた。

僕は、病院の古い新聞を見つけ出して、あの日のことを確かめた。あの日、まず、世界中ですべてのものがそれまでの形を失った。難しい言い回しだったが新聞に書かれていた表現を借りると「個別の形状を失い、同一概念の全ての実体に置き換わってしまった」のだそうだ。僕が空港に向かっているときに体験したあの現象だろう。その怪現象は、数時間で収まった。そして、破壊が始まった。

今度は、世界の至る所で大災害が発生した。一つの国よりも大きな台風や竜巻が大陸を蹂躪し、地震が全ての大地を揺るがし、原因不明の火災や爆発が起きた。人類の築き上げたすべての建築物が、その被害にあった。少数ではあったが、自然現象はなにも起きていないのに、建築物が生き物の死骸のように腐り溶けてしまったなどという報告もあったらしい。

その破壊は三日間続いた。そして、その後、唐突にその現象は起きなくなった。二度と起きなかった。だが、災厄によって、世界の人類と文明の半分以上は破壊され元に戻ることはなかった。

目覚めたとき、僕の体には刺青がしっかりと刻み込まれていた。手のひらを広げれば手の皺や指紋さえ、刺青の細かく折れ曲がった曲線に置き換わっている。手の甲にも、爪の内側にまで、模様は侵入していた。鏡を見れば、顔や耳だけでなく、頭髮がなくなり剃り上げたようになっている頭皮一面に鮮やかな色使いの模様が広がって、自分の素顔を思い出すこともできない。服の上からは分からないが、体の末端にもそれは続いていた。かつての王たちとは何

かが違うようだった。全身の皮膚を覆う奇妙な模様を見て、会う人は誰もが目をそらした。見つめれば心を奪われ目を逸らすことが出来なくなると、無意識のうちに気づくのだろう。

私の纏った刺青はいつもゆれ動いていた。世界に新しいものが生まれると新しい模様が生まれ、何かが喪われるとそれを指していた模様が綻び消えて行くのだと思う。世界のすべてを刻み込んだ刺青は、完成され、もはや人の手によって名前を刻む必要がないのだろう。自分自身で世界の存在の消滅を知り、その姿に写し取っているようだった。刺青は誰の目にも見えたが、その本当の意味を知る者はいない。その刺青の中には、あの王の名前もある。僕の体に移された名前からは膿が消え、王の名前と絡み合っていた名前もすべてが元に戻っていた。僕の記憶の中に生きている限り彼の名前が消えることはない。

故郷に帰ると僕は王国の最後の三年間の記録を読み返した。大災害にも崩壊せずに残った自分の部屋で、僕はこれまで書いてきた記録の紙片を床に積み上げ、それは人の背丈ほどになったが、すべて読み直した。時間はいくらでもあった。時々、書き漏らしていた些細な出来事を書き加えながら、最後まで読み終えると半年が経っていた。読み終えてからその最初のページに「所有の王国」という題名を書いた。それから、僕は左手の袖をめくって手首の刺青の中を探した。想像した通り、そこには今読み終えた記録につけられた題名が見つかった。名付けられたものはその瞬間に僕に属する。それが所有するという事だ。しばらく考えてから、僕は机の上に置いていた薬瓶を手に取り、その中身を手首にふりかけた。薬は何の痛みもなかったが、手首にあった記録の題名はすぐに消えた。前王が作らせた薬は完全に機能していた。名前が消えると、床の上に積み上げられていた紙の山が静かに形を失い消滅した。刺青の中で名前を失えばそれは僕の所有を離れるのではなく、世界に存在できなくなる。僕はそのような存在になっていた。だからこそ、僕は三年間の記録を消去した。この薬もあと数回使えばなくなるだろう。そして僕はただ所有するだけの王になるだろう。